

令和元年度大台ヶ原自然再生推進委員会
森林生態系・ニホンジカ管理ワーキンググループ（第2回） 議事概要

1. 日時 令和2年1月27日（月） 14:00 ～ 17:00

2. 場所 近畿地方環境事務所 大会議室

3. 参加者

【委員】

佐久間 大輔	大阪市立自然史博物館 学芸課長代理
高田 研一	高田森林緑地研究所 所長
高柳 敦	京都大学大学院農学研究科 講師
松井 淳	奈良教育大学教育学部 教授
村上 興正	元京都大学理学研究科 講師
八代田 千鶴	国立研究開発法人 森林総合研究所関西支所 主任研究員

【オブザーバー】

近畿中国森林管理局 計画保全部 保全課	淵上 弘文 野生鳥獣管理指導官
	上口 進 自然再生企画官
近畿中国森林管理局 三重森林管理署	役田 学 地域林政調整官
奈良県 農林部農業水産振興課鳥獣対策係	天野 留奈 主任主事
上北山村 地域振興課	更谷 亮太 主事補

【事務局】

環境省近畿地方環境事務所	玉谷 雄太 国立公園課長
	澤志 泰正 野生生物課長
	西 大輔 生物多様性企画官
	戸田 博史 野生生物課課長補佐
	関 貴史 吉野管理官事務所 国立公園管理官
	小川 遙 吉野管理官事務所 自然保護管補佐
(株) 環境総合テクノス	樋口 高志 環境部 マネジャー
	樋口 香代 環境部 リーダー
(一財) 自然環境研究センター	千葉 かおり 主席研究員
	中田 靖彦 主任研究員
	日名 耕司 研究員

4. 議事

- (1) ニホンジカに関するモニタリング調査結果について
- (2) ニホンジカの捕獲計画の検討について
- (3) その他の調査結果について

5. 概要：

(1) ニホンジカに関するモニタリング調査結果について

○資料 1-1 ニホンジカの生息状況調査結果

- ・ 生息密度指標の算出に必要なニホンジカの移動速度のパラメーターとして使った v1（平成 27 年度 GPS 調査結果）、v2（平成 26 年度以前の GPS 調査結果）の差が明確にでている。やはり GPS 首輪調査は必要であるという根拠になっている。
- ・ REM 法では移動速度のパラメーターによって生息密度指標にこれだけの差が出るということである。今後は年間を通じて 1 時間おきの GPS データを蓄積していく必要がある。個体差もあるのでもっとデータを集めた方がよい。
- ・ 今年の結果でみると、4 月であればパラメーターに v2 を使用すると v1 を使用した場合に比べて生息密度指標の実数値は 2 倍程度になる
- ・ 2019 年は冬も生息密度が高いという結果が出ている。植生への影響として、ササが減る可能性がある。シカは 1～3 月と 6～7 月はササをよく食べる。
- ・ 月ごとの撮影頻度と前月の捕獲頭数を合わせて示した図（図 21～図 24）については、撮影頻度の変化は季節移動なのか捕獲の影響なのかかわからないのではないかと。
⇒生息密度の増減で作ってみてはどうか。
⇒統計も使って考えてみる。捕獲が有意に効いているのかを捕獲のないところと比較して検討してみるとよい。
- ・ 捕獲の有る無しによる生息密度の変化の検討は全体でやる方がよい。

○資料 1-2 捕獲個体のモニタリング調査

- ・ 平均年齢の差は捕獲時期を反映するため、当歳を除いて比較検討をした方がよい。
- ・ 2019 年度の歯の齢査定は捕獲した順に（138 頭のうち）50 頭分を実施したため、母集団の年齢を正確には反映できていないと考えられる。
- ・ 東大台・西大台に分けて成長曲線をとる。サンプル数が少ないため、これまでの結果を合わせて作成する。

○資料 1-3 ニホンジカが植生に与える影響把握モニタリング結果

- ・ シカの生息密度とササの稈高の関係については長期にわたる全体の傾向でみる方がよい。

(2) ニホンジカの捕獲計画の検討について

○資料 2-1 令和 2 年度ニホンジカ捕獲目標頭数の設定

○資料 2-2 令和 2 年度ニホンジカ個体数調整の検討

- ・ 開拓ルートは捕獲効率が悪いと、2020 年度は捕獲を実施しないことになっているが、2019 年度はシカが捕れたのではないかと。
⇒開拓ルートで捕獲を行うよりは他の場所で実施した方が効率的であると考えた。
- ・ 2019 年度は捕獲目標レベル③を達成できたことから、実効性は高いといえる。足くくりわなは初期に比べると CPUE は低下してきているのではないかと。
⇒CPUE は低下してきている。2019 年度は正木ヶ原で足くくりわなを実施できたこと、空はじきが減ったことなどから CPUE が上がった。
- ・ ドライブウェイ沿いはシカの生息密度は低いと CPUE は他の地点と大きな差がない。CPUE の比較は

生息密度との関係性を見ながら示した方がよい。

- ・ できるだけ早い時期にわなをかけた方が効率的に妊娠メスを捕獲できる。
- ・ CPUE を 4 月、5 ～ 7 月、8 月以降に分けて捕獲計画、努力量を示すこと。
- ・ 他府県ではシカの捕獲を狩猟の延長で行っているので 2 ～ 3 月の猟期に捕ることが多い。2 ～ 3 月はシカが高い場所に上がらないため効率的に捕獲できる。今年は暖冬なので、下に降りない定着個体を捕獲するよい機会である。
- ・ 将来的にシカの密度が下がって捕獲が困難になってきた場合は、冬季の捕獲も考えなければならない。
- ・ 大型囲いわなについては、設置前から自動撮影カメラを設置しておくこと。
- ・ 北海道での大型囲いわなは、冬の餌が少ない時期にやっているので効果がでている。

○資料 2-3 大台ヶ原くくりわな設置に関する対策マニュアルの変更点（案）

- ・ 大台ヶ原くくりわな設置に関する対策マニュアルの改訂案は了承された。

（3）その他の調査結果について

○資料 3-1 蘚苔類調査および試験の検討結果

- ・ 蘚苔類が減少した要因は森林の状況やシカによる影響よりも、落葉の堆積などによる影響が大きいと思われるため、詳細調査は実施せず、従来より実施している大台ヶ原全体のメッシュ調査を継続することによりよい。
- ・ 苔探勝路はササの被覆により蘚苔類が減少しているが、蘚苔類の生息環境が失われているわけではないので、ササを減少させれば蘚苔類は回復する。観光客が期待しているコケを回復させるため、ササ刈り試験を実施する。実施場所は水道になっているようなところ、ギャップではなく半日陰がよい。
- ・ ササ刈りを行うことによる倒木周りの実生の定着にも期待できる。
- ・ 職員実行で実施するため詳細なモニタリングは実施しない。
- ・ 毎年 2 回刈りとればササは衰退すると予想される。
- ・ 光条件や水分条件との因果関係を示し、蘚苔類の再生ポテンシャルの高い箇所を選んでササ刈り試験をするといった実証実験的な流れにすべきである。
- ・ 試験の目的、作業仮説とその根拠をしっかりと示す必要がある。また、モニタリングは試験結果を検証できるようなものにしておく。
- ・ 苔探勝路では、地表性蘚苔類が生育できなくなるような乾燥した箇所はほとんどないため、ササを減少させれば蘚苔類は回復すると考えられる。試験の実施箇所については、水道など、微地形を実際に見て検討する。根拠は地形区分で示すようにする。

○資料 3-2 植生タイプ別調査結果

- ・ シカの忌避植物、嗜好植物の変化を見ておく必要がある。重要種についても見ておく。被度が高いものを見て何に着目すべきかを考える。
- ・ ササに被陰されても出現する植物もある。柵内、柵外で新しく出てきた種がどのようなものなのかを見ておく必要がある。
- ・ 種数だけの話ではなく出てきた種の特性をみることが重要である。
- ・ 変化のないもの、あるものを並べて示すよりも、自然再生の観点からわかりやすい効果だけを絞

って示した方がわかりやすい。

- ・ 自然再生の効果を見るための評価軸を意識しておくこと、再生ポテンシャルがどう変化したのかを見る必要がある。

以上、意見の順不同